

## 国立公害研究所における環境研究



国立公害研究所長

近 藤 次 郎

国立公害研究所の環境研究は三つの大きな特色を持っている。それらは国際性、学際性、開放性である。

環境問題には国境がなく、日本で成功した環境対策はそのままアメリカにもソ連にも適応するはずである。また、その研究内容には国防にかかわる軍事秘密はなにも含まれていない。われわれの発見した事実は国境をこえて真理であり、この意味でも国際的である。現在、7名の所員が欧米各国に滞在して研究しており、他にもソ連、近隣諸国を含めて、遠近各国へ指導、視察や学術発表の目的で短期間渡航した職員は10名を超えた。

環境研究の内容は森羅万象にわたり、環境と人間活動との関係やその選好の研究には理工学から生物・医学にいたる自然科学だけではなく、人文・社会科学までも含んだ学際的研究が必要である。研究所員のうちおよそ100名は学位をもっているが理、工、医、薬、農のほか経済学博士までも含んでいる。しかし学際的というのは、たんになんでも揃っているというのではない。同一のテーマに向って、おのおのの特徴を活かして協同して研究するというのでなければ意味がない。実際に、わが研究所で類のない研究が完成するとすれば、それはこのような学際的研究によるものであろうと期待される。そのためにシステム工学的管理を行っている。

国立公害研究所はいわゆる開かれた研究所として運営され、所外の頭脳的支援をうけ入れている。現在、研究に専念する職員はおよそ150名であるが、ほぼ同数の客員研究員を外部より迎えている。また地方の若手研究者、院生など20名以上の人が常駐して共同研究員として研究に従事している。その他、学会・委員会などには積極的に参加して、社会のニーズに合致した研究テーマを採りあげ、専門家の独りよがりにならないように注意している。

6月末にソ連アカデミー副総裁の一行が視察のため来所され、設備も内容も他の国に例がないと感想を述べた。米、仏、独等からの環境学者もよく来られるが、異句同音に設備や組織が世界一流であると褒める。

それなら、研究成果も世界一かという質問が、実は私どもにとって一番痛い問いである。評価は自分でやるものではなくて人々がするものであり、それには研究者の謙虚さをもって耳を傾けたい。海外における知名度が目を追ってたかまりつつあると聞くのは嬉しいことである。